

# 第1章『ピクウィック・クラブ』

## ピクウィック氏のげんこつ

中和 彩子



「ナイトキャップを奪われるピクウィック氏」(第41章、フィズの挿絵、ハウスホールド版)

フリート監獄での最初の夜の椿事。次の瞬間にピクウィック氏の繰り出すげんこつが、男たちと読者の不意を打つ。

『ピクウィック・クラブ』は暴力にあふれている。ピクウィック氏の冒険は御者に喧嘩を売られて殴られるところから始まり、旅の一行は絶えず暴動や暴力沙汰に巻き込まれて滑稽な姿をさらす。ピクウィック氏は馬車の転覆や扉からの落下といった事故にも見舞われる。「太った少年」は絶えずつねられ、叩かれ、蹴飛ばされる。サム・ウェラーの言葉やたとえ話、小説の本筋とは無関係に挿入されるいくつかの物語は暴力的なイメージに満ちている。法や司法の暴力性は、非人道的な債務者監獄のほか、法を守る警棒やサムが「彼の死体を受け取れ (have-his-carcase)」だと思ひ込む人身保護令状 (*habeas corpus*) といった象徴的な形で表現されている。

これらさまざまな暴力のうち、本稿は、ピクウィック氏がただ一度、フリート監獄で振るつたげんこつに注目して小説の新たな読みを提示する。

## 第一節 暴力の抑圧

温厚とされるピクウィック氏だが、小説全編を通じて、不正や侮辱に憤慨しては暴力に訴えようとする傾向も強調されている。ピクウィック氏の陽気な物語と不気味で残忍なゴシック的挿入話の世界が「収斂」することを示したクリストファー・ハーバートが指摘するとおり、「激しい／暴力的な (*violent*) 怨嗟や憤慨を抱きがちなピクウィック氏が感情の暴発に身を任せる

のを、彼の仲間たちは繰り返し止めなくてはならぬ」(Herbert 1516)。このような人物造型と暴力行為未遂の反復とが逆説的に示すのは、ピクウィック氏が暴力を回避しなくてはならない人物であるということだ。ハーバートも挙げている例から、二つの場面を引いてみよう。

ピクウィック氏が初めて暴力に訴えようとするのは、軍医のペインに公然と侮辱されたときである。ピクウィック氏は激怒して相手を追いかけようとする。スノッドグラス氏が力づくで引き戻さなければ「次の瞬間には、彼の手は第四三連隊のドクター・ペインの喉にかけられていたことだろう」(第三章)。また、悪徳弁護士フォッグがピクウィック氏の義憤を煽つておいて「ピクウィック氏の固く握りしめた拳の届くところに、まるで殴つてくれと言わんばかりに身を置いた」際は、サムが割つて入らなければピクウィック氏は本当に殴つていただろう、と語り手はコメントする(第二〇章)。

第三章の結末に典型的に見られるように、ピクウィック氏はひとたび興奮が収まればすぐに自分を恥じ、温厚で人好きのする人物に戻る。ピクウィック氏自身も、感情の暴発や暴力が自分にふさわしくないものであると認識しているのだ。だから暴力への衝動を自分で抑える場合もある。例えば、ジングル氏に侮辱されたピクウィック氏は、思わず両拳を握りしめるが我慢する——ただし、続けて友人たちを侮辱されて激怒し、インクスタンドを投げつけながら突進したところを、宿屋の靴磨ぎであつたサムに抱きとめられる、というおまけが付くのだが(第

一〇章）。法廷で上級弁護士バズファズに侮辱され、「あたかも「彼を」襲撃してやろうという漠然とした考えがふと兆したかのように、激しく、暴力的に、ぎくりとした (gave a violent start)」ピクウィック氏は、パーカーからの注意の身振りを見て自制する（第三章、強調は引用者）。ピクウィック氏は、暴力に訴えようとするもそれを完遂しない、できないというパターンを繰り返す。フリート監獄で放つ一発のげんこつは唯一の例外である。

むろん、ピクウィック氏の憤慨がつねに暴力に行き着くわけではない。口論や演説によって暴力が回避される場合も多い。イプスウィッチでの決闘騒ぎ（第二章）を例にとってみよう。激しい口論の末、マグナス氏が沙汰を待てと言い渡し、ピクウィック氏がなるべく早くに願うと応じて二人は別れるのだが、それを聞いていたマグナス氏の婚約者は決闘が行われるものと勘違いしてしまう。しかしその後のピクウィック氏が「沙汰」を気にかけている様子はなく、マグナス氏のほうもいつのまにか逐電する。語り手は、マグナス氏の婚約者が議会や上流社会の人々の作法や慣習を知っていたならば「こうした「口論における」獐猛さは、この世で一番無害なものにはかならないとわかっただろう」とコメントする。ここでは女性の世間知の欠如が揶揄されるだけでなく、「文明的な生活の独特の工夫」として了解されるべき口論と野蛮な暴力とは区別しがないものだということが露呈している。上流階級や士官の間で十六世紀以来の慣行となっていた決闘は、暴力や名誉をめぐる考え



図版①「ピクウィック氏の防御の体勢」（第15章、フィズの挿絵、ハウスホールド版）

原文とは違い、ピクウィック氏の足元にタップマン氏の手袋が投げつけられている。

方の変化によって、十八世紀を通じて回避や儀式化の方向に進んだ。一七七〇年代以降は福音主義やミドルクラスの価値観からの批判に追い打ちをかけられ、決闘はますます社会的に認められなくなっていた。<sup>1</sup>従って、ミドルクラスであるピクウィック氏が用いる決闘の語彙は、様式化された口先だけのものではない。<sup>2</sup>それでもピクウィック氏の発言は、決闘を十分に予期させるものとして扱われる。本物の暴力と「文明的」で「無害な」癡猛さとの区別の危うさは、ピクウィック氏が怒りの熱弁を振るう直前に「握りしめた拳で力強くテールを打つ」たり、強い決意を表明しながら「テールを「拳で」叩い (hammer)」たりする動作によっても示される(第一八章)。口論や演説は純粹に言語的な営みではなく、そこには身体の暴力が幽霊のようにつきまとっている。

ピクウィック氏が拳闘術を心得ているかのように振る舞うのも、抑圧されながら完全に消えることのない暴力の存在を示しているといえる。タップマン氏とピクウィック氏がひよんなことから激しい言い争いになり、タップマン氏が腕まくりしながら「手っ取り早い復讐」を宣言したとき、ピクウィック氏は「さあ、来い」と言うなり、防御の体勢のつもりらしい身構えをする(第一五章、図版①)。

松井良明によれば、イギリスにおけるボクシングの歴史は概ね王政復古時代に遡り、素手による決闘じみた殴り合いに端を発する。十八世紀になり、「貴族やジェントリが個々に拳闘家を庇護し、懸賞金付きの試合をさかんに開催しはじめ」るにつ

れ、ピュリズムとして形式が整えられていく。一八一一年に始まる摂政時代がピュリズムの全盛期であった。懸賞試合の興行だけでなく、グラヴを使用したエキシビションの興行や、上流階級の間で流行した、やはりグラヴを使用するスパリーリングが、ピュリズムの文化を形作った。それは上流階級から試合を見に集まる下層階級まであらゆる階級の人々が関わる文化であった。ピュリズム文化の隆盛の中で、一八一四年のヘビュリステイック・クラブ<sup>3</sup>設立は画期的な出来事だった。このクラブは富裕なパトロンを主要な構成メンバーとする『リスペクタブル』な団体であったと伝えられ、従来個別に開催されていた試合を統轄し、ピュリズムの発展を促すことを目指した。ヘビュリステイック・クラブ<sup>4</sup>の制服の上着の折り襟に付けられた、PCの文字が刻まれたボタンは、偶然だがピクウィック・クラブの「ピクウィック氏の胸像を中心に、左右にPとCの字を飾った大きな金メッキボタン」(第二章)を思わせる。実際の拳闘に至らないピクウィック氏の拳闘の構えには、素手による決闘の痕跡を残しながらも、様式化が完成を見、リスペクタブルな人々を含むすべての階級のものになったピュリズムの両義性が表れている。

ピクウィック氏の暴力はまた、語りのレベルでも抑圧される。イータンスウイルの下院議員補欠選挙で、候補者指名の会場に向かう二派の行列が合流してしまつたとき、ブルー派のピクウィック氏は、最初にバフ派の旗の棒で叩き落とされた帽子が「目と鼻と口にかぶさってしまったので」事情を理解できない。

彼自身の描写するところでは、その場の光景を一目でも見られるようになったとき、彼は怒った獯猛な顔々、もうもうたる砂埃、そして闘士たちの八重垣に囲まれていた。彼自身の表現によれば、彼は目に見えぬある力によって馬車から引きずり出され、みずから拳闘試合 (pugilistic encounter) に参加したが、誰を相手に、どんなふうにも、またどうして闘ったのかは述べることがまったくできない。(第一三章)

乱闘に巻き込まれたピクウィック氏がほとんど何も見ず、意識もなかったことが強調される。彼が振るったはずのげんこつは、記録者であるピクウィック氏自身、次いで記録の編纂者（小説の語り手）により、テキスト上で抑圧されるのだ。

## 第二節 暴力と身分

対照的に、ピクウィック氏の使用人サムは、暴力の抑圧と無縁の人物である。サムは、駅伝馬車の御者をしている父親や、第二章でピクウィック氏一行にいわば素手による決闘を挑む辻馬車の御者（名前はやはりサム）と同様、必要とあらば暴力を振るうことを辞さない。また彼が主人に語り聞かせるエピソードは決まって暴力的なものであるし、彼の言語（ウエラリズム）は暴力の比喩に満ちている。この召使いの存在が、ピクウィック氏の暴力が抑圧されるべき理由を逆照射してくれる。

ピクウィック氏には欠けている世知の持ち主であるサムは、



図版②「サムの大活躍」（第24章、フィズの挿絵、ハウスホール版）  
ピクウィック氏が椅子かごの屋根を押し開けたところ。

前節で示したように、ピクウィック氏が無益な暴力を振るおうとするのを二度にわたって止めている。しかしサムより重要な役割は、主人の暴力を、主人のあずかり知らぬところで肩代わりすることにある。

サムは、囚われたピクウィック氏を救い出そうとして躊躇なく暴力を振るう。ピクウィック氏が無断で土地に侵入した罰で囲い場に監禁された上、群衆に罵声や物を投げつけられる場面では、サムが「教区吏との一騎打ちの第三にして最終ラウンドを終えた」と同時に、ウォードル氏がピクウィック氏を馬車に押し込み終えている（第一九章）。また、イプスウィッチで逮捕されて椅子かごで護送されるピクウィック氏を救うために、サムは一人で何人もの引率や護衛の男たちを殴り倒す。その間ピクウィック氏は「椅子かごのドアは開こうとせず、ブラインドもあがろうとはしなかった」ために、限られた視界からサムの活躍を見ているほかない。やがてどうにか屋根を押し開けて姿を現すと、自分が受けた不当な扱いやサムの暴行の正当性について、群衆に向かって演説し始める（第二四章、図版②）。ここでは、演説しできないピクウィック氏と存分に暴力を振るうサムの姿とが、対照的に描かれる。

以上の例において、ピクウィック氏は自分のために振るわれる暴力を見ることができないか、暴力を止められない状態にある。逆に、ピクウィック氏がそばで見ているときにはサムは暴力を遂行できない。サムは、早朝にやってきたナンビー氏が目覚めたばかりの主人のベッドのカーテンを勝手に開け、強

制執行令状と名刺を示すのを見て、礼儀作法について皮肉を言う。それで短い口論となり、サムは「帽子を脱ぎたまえ」と命ずるなり「非常に巧みに」帽子をふっとばしてしまふ。それは「ナンビー氏が、使っていた」金の楊枝を飲み込みそうな勢い（violence）だった。ナンビー氏はピクウィック氏に「これを見てください」と訴え、「わたしは身体に危害を受けるおそれがある。あなたに目撃者になってもらいます」と要求する。サムはナンビー氏に対抗して主人に「何も目撃しないでください」、「しっかりと目を閉じてください」と命じ、「こいつを窓から放り投げてやります」と暴行を予告する。するとピクウィック氏はサムを厳しく叱りつけ、公務執行妨害をやめさせる（第四〇章）。ほかにピクウィック氏は、正体を暴露されたジングル氏とともに追放されるジョブをサムが追いかけてよとするのを止め、サムが失望したことには「やつつけ」することも「門から蹴り出す」ことも許さない（第二五章）。「モーゼズ・ピクウィック」と大書した駅伝馬車を主人への侮辱と捉えてサムが指示を仰いだときには、ピクウィック氏はまったく取り合わず、少なくとも「その場で自分が車掌や御者に拳闘試合を申し込む権限を委任されるものと予想していた」サムを落胆させる（第三五章）。ピクウィック氏は、サムが振るおうとする暴力を、止められる状況にある場合は必ず止めるのだ。

一度だけ、ピクウィック氏はサムに暴力の代行を命じる。ダウラー氏とのトラブルを恐れて逃げ出したウィンクル氏を連れ戻すため、「逃げ出そうとしたら、彼を殴り倒すか、閉じ込め

てしまふように」と言つてサムを派遣するのである。呑み込みのよいサムも「殴り倒す」との指示には耳を疑つて主人に再確認するが「必要と思つたことをするがいい。おまえはわたしの命令を受けているのだから」と言われる(第三七章)。着いてみるとウィンクル氏を連れ戻す必要はなくなつていたものの、サムは主人の言葉を盾に交渉し、監禁の体裁を整える。しかし「殴り倒す」ほうはやり損ねたので残念がる(第三八章)。このエピソードは、ピクウィック氏の暴力が必ず未遂に終わるというパターンの変種であると同時に、サムの持ち前の暴力性を主人が当然のように利用する可能性を示している。

以上のようなサムの立場と役割を囚らずも言い当てているピクウィック氏の発言がある。ジングル氏の悪だくみを阻止すべく、女子学寮に扉から侵入しようとしたピクウィック氏は、「弾力性を帯びた」身体のせい、押し上げてくれたサムの力が意外に強かつたせい、扉の向こうに投げ込まれてしまふ。サムが驚いて、「お怪我はなかつたでしょうね(You ha'n't hurt yourself, I hope, sir?)」と声を掛ける。文字通りには「あなたは自分自身を傷つけなかつたか」というその問いに、ピクウィック氏は「たしかに、わたしは自分を傷つけなかつたよ、サム(I have not hurt myself, Sam, certainly)」と答え、「(か)、おまえが、わたしを傷つけたように思つたよ(But I rather think that you have hurt me)」と付け加える(第一六章)。この二文はあたかも、ピクウィック氏が、暴力行為の主語になるのを回避するためにサムを必要とすることを象徴しているかの

ようだ。

バーバラ・ハーディは、学のあるピクウィック氏がサムの語つた物語を「編集した」体裁の「教会の庶務役員の物語」(第一七章)に言及して『ピクウィック・クラブ』は階級意識が非常に強い(Hardy, 37)というコメントを軽く付け加えているが、これは暴力という観点からも当を得ている。暴力を禁忌とするミドルクラスの紳士ピクウィック氏が、もともと暴力との親和性があるサムを従者にすることで、暴力を肩代わりさせる結果となるのだ。だからこそ、ピクウィック氏自身がひとたび暴力と結びつけられるや否や、その紳士たる身分は不安定なものとなり、格下げの危機にさらされる。そのことが明らかになるのが、ボールドウィッグ大佐とのエピソードだ。

所有地への「庶民(common people)」の侵入を極端に嫌う大佐は、侵入者ピクウィック氏を見つけ、太い杖で突きながら名前を尋ねる(第一九章)。パンチを飲んで泥酔していたピクウィック氏のつぶやきから、「パンチ」と名乗つたものと勘違いした大佐は、その人を食つた答えに激怒し、「酔つ払つて、酔つ払いの庶民(plebeian)だ。手押し車ごと運んで行け」と園丁に命じる。どこへと問われて「悪魔のもとへ運べ」と答える。悪魔はパンチ・シヨールにおける伝統的な敵役である。つまりピクウィック氏は、地主によって暴力的なパンチ人形と同一視されるとともに庶民≠紳士に分類されてしまふのだ。

イプスウィッチでの決闘騒ぎもピクウィック氏を格下げする。ナプキンズ氏はピクウィック氏を決闘の首謀者とする訴え

を受け、自分が治安判事である以上、この土地で決闘をしようなどという輩がいるわけがないと反論する——なぜなら、自分には素手による拳闘の懸賞試合（フライイング・フェイス）のリングに駆けつけ、試合を止めたという実績があるのだから。それでも結局、ピクウィック氏を主犯、タップマン氏を「もう一人の暴徒（rioter）」と呼び、両者をまとめて「ロンドンから来た二人の人殺し（cut-throats）」と非難した上で、決闘を計画した廉で逮捕状を出す（第二四章）。治安判事は、公共の秩序を守るために強硬に取り締まるべき犯罪行為として、決闘と懸賞拳闘試合、暴動、そして殺人を同一視する。

婦人の体面を紳士らしく守り抜こうとして、議会や社交界のお歴々のような文明的な言い争いをしたピクウィック氏が、皮肉にも、治安の擾乱という共通項から暴徒または暴力的な犯罪者に格下げされてしまう。のちにピクウィック氏らと一緒に捕まるサムは、治安判事に居住地を尋ねられて「住めるところならどこでも」と答え、浮浪者として逮捕される（第二五章）。ピクウィック氏の格下げに伴って、その召使いも浮浪者に格下げされるのだ。

以上のいずれの場合も、ピクウィック氏の格下げは表層的、かつ一時的なものにすぎない。しかしこれらのエピソードは、彼の地位の安定がいかに暴力の回避にかかっているかを明示している。ロンドンに下宿住まいするピクウィック氏の紳士としての立場を保証しているのは、実のところ同語反復的な構造ではない。彼は召使いを連れて紳士らしい振る舞いをする限り

において紳士なのだ。

『ピクウィック・クラブ』を歴史的な文脈の中で読むデイヴィッド・パーカーは、ボールドウィッグ大佐のエピソードを、新興地主と都市のミドルクラスの紳士との間の階級闘争として分析している。パーカーは、ピクウィック氏一行に、上流階級が独占していた特権の拡張を求める野心的なミドルクラスの姿を見出す。一八二〇年代、三〇年代には、地主階級から商工業階級への権力の移動を反映して、領地への侵入者への対応が盛んに議論されていた。十八世紀末までには人罾やばね銃の使用に対する反対の声が上がりが、一八二七年にはそういった仕掛けを禁じる法案が通過したものの、それでも脅しに使う地主はいた。また、ヘキャプテン・スウィング暴動<sup>7</sup>をきっかけに、積み藁や農具などを守るためにはばね銃を使うとよとする法案が出されたが、否決された。ボールドウィッグ大佐が、こうした一連の議論において地主の立場を強化する側に立っていることは明らかである。階級上昇を達成した大佐（海軍上りの新興地主であることがテクストから立証できる）は、上昇志向のミドルクラスの人々との差別化を図るため、排他的な特権に固執するのだとパーカーは論じている（Parker 203-04）。イプスウィッチの治安判事のエピソードも、フィッツマール大尉をめぐる騒ぎを踏まえれば、さらに繊細な階級意識を反映するものと読めるだろう。ナプキンス一家は、貴族の知人が多くいるという触れ込みで態度も当世風の大尉（実はジングル氏）との交誼を得たことで、ライバルのポーケナム家の優位に立つ

（第二章）。より上の階級とのつながりを求める治安判事（彼の家庭には、使用人として従僕とコックと女中が一人ずつと、下働きの粗野な少年少女がいるだけである）は、ロンドンから来た紳士ピクウィック氏をことさらに格下げる。

### 第三節 一発のげんこつ

ピクウィック氏の暴力を抑圧し続ける小説が、ただ一度ピクウィック氏に暴力を振るわせるのが、フリート監獄の最初の夜の場面である。債務者監獄は、品位を落とす代わりに「一切の社会的責任から解放」される空間である（パターンソン三二七）。サムや仲間から切り離されて「粗野な下層民集団（coarse vulgar crowd）の中でひとりぼっち」（第四章）となったピクウィック氏は、紳士らしく振る舞う理由を失ったかのごとく、下層民相手に下層民よろしく暴力を行使する。しかしピクウィック氏は、格下げの危機を克服しようとするかのように、「**へ持てる者**」**へ施しの人**」としての姿を現すようになる。この経緯をテクストに即して分析してみよう。

ピクウィック氏は大部屋のベッドを貸し与えられるが、運よくひとりきりで深い眠りにつく（第四章）。しかしそれもつかの間、いつのまにか入ってきていた男たちの大騒ぎに目を覚ましてしまう。「西風」と呼ばれる男が、一人の男に嘯し立てられながらホーンパイプ踊りを始め、「窓をがたがた言わせ、ベッドの枠組みをさらに震わせるほどの激しさ（violence）で

部屋が揺れる」。別の泥酔した男もベッドの中で歌う。男たちはピクウィック氏を酒に誘い、「西風」はピクウィック氏のかぶっていた「ナイトキャップを「帽子掛けの釘に」かけさせてください」と言うなり奪って、泥酔した男の頭にかぶせる。

人のナイトキャップを暴力的な手段（violent means）で額からかつらい、それを見た目の汚い未知の紳士の頭に乗せるなど、それ自体は実に気の利いた洒落かもしれないが、紛れもなく悪ふざけの部類に入る。事をまさにこのように見たピクウィック氏は、自分の意図を些かもほのめかすことなく、勢いよくベッドから飛び出し、「西風」の胸に一発、きついげんこつ（a smart a blow）をお見舞いし、ときどき彼の名前がついているもの「息」を大量に吐き出させ、しかるのちにナイトキャップを奪い返して、勇敢にも防御の体勢をとった。

「さあ」とピクウィック氏は言った。相当なエネルギーを消費したためばかりでなく、興奮のために息をあえがせて。「さあ来い——二人とも——二人とも——こうして相手に気前のよい誘いをかけると同時に、この立派な紳士は拳闘の術を披露して敵を驚かさないと、握りしめた両拳に回転の動きを伝えた。（第四章、強調は引用者）

暴力的に、部屋を揺らし、暴力的に、ピクウィック氏のナイトキャップを奪った男に対して、ピクウィック氏は不意のげんこつの一撃を与えたあと、拳闘試合を挑む。彼の拳の早業と挑発

のセリフは、第二章でピクウィック氏一行に喧嘩を吹っかける御者の振る舞いをほとんど反復したものだ。第一節で触れたように、拳闘の術を心得ていること自体は必ずしも非紳士的であることを意味しない。しかしピクウィック氏は実際にげんこつを放つことで、とうとう御者やサムと同類になってしまう。あまつさえ挑戦された男たちはなぜか——「ピクウィック氏のまったく予想外の勇敢さ」のためか「複雑な身のこなし」のためか——感動し、それから笑い出し、朗らかに和解の握手を求め、自己紹介する(第四章)。ピクウィック氏が名乗り返す必要性に思い至らないために、その場に気まずさが生じるにもかかわらず、ピクウィック氏は仲間として気持ちよく受け入れられる。特に自称紳士のスマングル氏がピクウィック氏を紳士扱いして親しみをみせる。下層民の「暴力的」振る舞いに下層民的な暴力で応えて紳士らしさから逸脱したピクウィック氏は、下層民の一員に位置付けられるのだ。

この場面でピクウィック氏が行使する暴力には、これまでの未遂だった暴力にはない特徴がある。それは、不正や侮辱への憤りが原因ではないことだ。げんこつは、奪われたナイトキャップを奪い返すために繰り出される。これは小説の中でピクウィック氏が唯一、所有権を侵されたことに対して暴力を振るおうとする場面なのである。

だからこそ所有を守るこのげんこつを境に、ピクウィック氏は〈持てる者〉すなわちブルジョワとして提示されるようになるのだ。ピクウィック氏はスマングル氏に「新入りはおごり役」

と言いくるめられ、相場がわからず過分の金を出す(第四章)。翌朝にはサムの持ち込んだ旅行鞆の中身によってスマングル氏を圧倒する(第四章)。割り当てられた相部屋の先輩債務者たちから「金はフリート監獄の内でも、外とまったく同じものだ。金があれば欲しいものはほとんど何でも即座に手に入る。金があつて、しかも金を使うことに異存がない場合、一部屋を占有したい意思を示しさえすれば、ものの三十分で部屋が、しかも家具付きで、手に入るだろう」と教えられると即座に実行する(第四章、図版③)。監獄に「貧乏人の側」があると思えば興味をそそられ、困窮した債務者に対する苛酷な扱いに憤慨する(第四章)。ついには監獄中を見回ったあと、頭と心を痛めるあまり三ヶ月の間自室に閉じこもる(第五章)。ピクウィック氏の言動、考えのすべてが、新たに得た〈持てる者〉としてのアイデンティティを表現する。

繰り出された一発のげんこつによるピクウィック氏のアイデンティティの変化は徹底している。というのは、ピクウィック氏は同時に、過去と未来も手に入れるからだ。

ピクウィック・クラブ会長の肩書のほかは「商売からすでに退き、働かずに暮らせる相当な収入のある紳士」(第四章)と伝えられるのがせいぜいだったピクウィック氏の身の上と、監獄のエピソード以降、時間的奥行きが与えられる。ピクウィック氏は弁護士のパーカーを通じてジングル氏に就職口を手配するが、その際、「リヴァプールの支配人は、『ピクウィック氏の』現役時代には何度となくお世話になったものだ、『ピクウィッ



図版③「信じられない知らせ」（第47章、フィズの挿絵、ハウスホールド版）  
家具付きの上等な個室に収まっているピクウィック氏。パーカー氏との用談中に新婚のウィンクル夫妻が押しかける。

ク氏の」ご推薦なら喜んで彼を引き受けよう、と言つてい」たという話が伝えられる（第五章）。ジングル氏はデメララに送り出される。デメララは南米にあるイギリスの植民地で砂糖の産地であり、精糖業はリヴァプールの主要産業の一つであった。ピクウィック氏が砂糖の仲買人であったかどうかは推測の域を出ないものの（青木他二六八）、ピクウィック氏の現在の裕福さに、急に明確な説明が必要になったかのように——監獄でのげんこつが不安定にした紳士としての地位を裏付けてくれるのは、いまや富だけである——具体的な過去の一端が初めて明かされるのだ。

過去を手に入れたピクウィック氏はまた、未来を気遣う人になる。新婚のウィンクル夫妻、サムとスノッドグラス氏を被保護者と考へて将来の計画を立ててやろうとするともに、彼らの結婚が自分自身の「将来の生活様式をすっかり変えることになる」（第五十六章）ことを見越して隠居するための家を借りることにする。

小説の最後に付された伝記的補遺においては、ピクウィック氏がトニー・ウェラーから預かった財産をうまく投資していたために、トニーが一年後に病気で御者をやめたときには引退生活ができるかなりの収入があつたと伝えられる（第五七章）。財産の蓄積、財産の投資を行うのが正しい資本家の姿であり、〈持てる者〉という性格付けを得たピクウィック氏が過去と未来を獲得することには必然性があるといえるだろう。

ピクウィック氏の身の上、小説内で語られる行動や事件の

因果・継続を超えた過去や未来が呼び込まれ、睡眠と忘却で毎回の冒険がリセットされるといふピクウィック氏のあり方 (Miller 21) も終わりを告げる。監獄での拳闘の前後にピクウィック氏の熟睡が妨げられる (第四章) のは象徴的な出来事といえよう。最終的にピクウィック氏の物語は、彼自身によって過去と未来の広がりの中に位置付けられる。回顧とはほとんど無縁であったピクウィック氏が、友人たちの前で「以前の人生のほとんどは商売と富の追求に捧げられていた」ことを認め、この二年間の経験が「老いの坂をゆく身に、面白く楽しい思い出の種になる」に違いないと述べるのだ (第五章)。ピクウィック氏はこうして適及的に人生を獲得する。

ピクウィック氏が所有のために暴力を振るうことを小説は例外的に許す。選挙の際の乱闘でピクウィック氏が「拳闘試合」に参加したことに關して曖昧な要約で済ませる語りとは対照的に、監獄でのピクウィック氏の拳闘の技は諧謔交じりに活写されるのだ。そして以後、つじつま合わせのように、〈持てる者〉としてのピクウィック氏の生活と人生が肯定的に提示される。しかしテクスト上、この暴力のためにピクウィック氏の下層民への格下げが起こっていることもまた事実である。そこで、例外的な暴力を十分に正当化し、ピクウィック氏の地位を回復するため、もう一つのげんこつが突き出される必要がある。

#### 第四節 もつ一発のげんこつ

げんこつを振るった翌日、ピクウィック氏は監獄の中の「貧乏人の側」を訪れ、すっかり落ちぶれたジングル氏と再会し、同情を覚える。そして、相変わらず忠実に召使いを務めているジョブを呼びつけ、「厳しい顔つきをしようとしながら」大粒の涙をこぼして言う——「これを受け取れ／これを喰らえ (Take that, sir)」。このセリフに対し、語り手が介入する。

何を受け取れて？ こうした言葉のふつうの意味では、それは一撃を喰らわすこと (blow) であったはずだ。世間一般でいえば、それはしたたかな平手打ち (sound, hearty cut) になって当然である。なぜならピクウィック氏は、今ではすっかり自分の掌中にある、社会から放逐された一文無し「ジングル氏」によって騙され、欺かれ、ひどい目に遭わされてきたからである。(第四章)

語り手は、ピクウィック氏が仇敵の腰巾着に復讐の一撃を喰らわせても不思議はないことを読者に納得させようとする。続いて「真実を語らねばならないのだろうか？」と勿体ぶってみせてから、「それはピクウィック氏のチョッキのポケットから出されたものであり、ジョブの手に渡されたときチャリンと鳴った」と答えを示す。要するにピクウィック氏は、ジングル氏に

与える金をジョブに渡したのである。

ピクウィック氏はかつて、ジングル氏に騙されて女子学寮で屈辱的な目に遭った夜、今度会ったらただではおかないと息巻きたながら「枕をものすこし一撃 (tremendous blow) でへこませ」ていた（第一六章）。その後、顔を合わせる機会はこの場面を含めて二度あるのだが、二度とも復讐の一撃は放たれない。ピクウィック氏の暴力は必ず未遂に終わるといふパターンを踏襲している。

しかしこの場面でより重要なのは、語り手の操作である。ピクウィック氏はすっかりしおれた仇敵に最初から同情し、思いやりの涙をこぼした上でジョブを呼びつけているというのに、そんなピクウィック氏のセリフを語り手はわざわざ曲解し、げんこつが振るわれる可能性に言及する。それにより、ピクウィック氏が直前の章で振るったばかりのげんこつの記憶が呼び起こされてしまう。

このげんこつの二重写しによって語られる「真実」は、所有のための暴力を振るう手が、だからこそ金を握る手でもあるという、いわばブルジョワの「真実」である。ここで語り手が提示しているのは、ピクウィック氏が「持てる者」であることに加えて「施しの人」という役割を与えられる瞬間なのである。慈善の手としてのげんこつは、先に放たれた暴力としてのげんこつが暗示する所有の暴力性——侵入者を排除しようと試みる、狭量な地主ボールドウィック大佐と同質の——を帳消しにし、ピクウィック氏が「持てる者」であるからこそ慈善行為が

可能だということを示す。

つまり、ピクウィック氏はこの慈善のげんこつによって初めて、善きブルジョワというアイデンティティを確立するのだ。それは債務者監獄の内側だけでなく、外でも通用することが、続く物語によって証明される。

ピクウィック氏はジングル氏の債務を肩代わりして監獄から出してやり、職の斡旋までする。出所の際は、ピクウィック氏の「同情と慈悲の分だけ幸せになった」債務者たちが握手を求めて殺到する（第四七章）。そして新婚のウィンクル夫妻、これから結婚するスノッドグラス氏やサムへの経済的援助を計画し、トニー・ウエラーが妻の多額の遺産を持て余していると相談に来れば管理を引き受けてやる。ロンドン近郊に隠居したピクウィック氏は、「近隣の貧しい人々すべてに知られており、「散歩中の」彼が通れば、皆大きな敬意を払って必ず帽子を取る」（第七五章）。

「裕福な都会のミドルクラスの紳士」という地位の不安定さを、暴力との不安定な距離によって露呈させていたピクウィック氏が、所有のための暴力の行使、そしてその暴力の糊塗を通じて、持てる金の力を正しく使う人物となる。その変化は、下層民との関係にも顕著に反映される。小説前半ではことあるごとに群衆に敵視され嘲笑されるピクウィック氏が、一度彼らと同一地平に落ちて和解を見、最後にはその庇護者という安定した地位に到達するのだ。憤激しやすい性質は変わらないのに、友人たちに暴力を止められることがなくなり、逆に友人たちの

暴力を止めるといふパターンが繰り返される（第四八、五一章）のは、彼が新たに得た庇護者という立場を象徴しているといえよう（図版④）。

変化するピクウィック氏の地位は、当時のミドルクラスの地位の提喻と読むことも可能だろう。前述のデイヴィッド・パーカーは、『ピクウィック・クラブ』が、その文学的起源の一つであるコックニー・スポーツマン・ジャンルのように野心的なミドルクラスの主人公たちの分不相応な振る舞いを笑うだけでは終わらず、ピクウィック氏一行を、屈辱をくぐり抜けた先まで到達させようとしていると論じる。パーカーは、一八三六年連載開始の『ピクウィック・クラブ』の物語を一八二七年に設定しているところに、ディケンズの直観的な戦略を見出す。この作品で、無意識にしる「社会の変化する瞬間を、その複雑さごと捉えたかった」ディケンズは、一八三二年の選挙法改正を真ん中に挟んだ、ミドルクラスが慣れない地位に戸惑いつつ躍進する十年間を視野に入れたのである（Parker 205-06）。

財産と徳を兼ね備えた紳士として疑似家族に囲まれて隠居するピクウィック氏は、クリストファー・ハーバートのように小説の中心的テーマを「自由」であると捉えるならば、たしかに一つの監獄を出て別の監獄に入ったようなものだ（Herbert 5）。しかし、このピクウィック氏の到達点には少なくとも暴力の影は一片も存在しない。彼の手がそのことを象徴している。初登場の際に「片手を宙で振り回し」ながら演説をぶつてクラブ内に口論を巻き起こし（第一章）、その後何度も拳を固めて暴力



図版④「粉袋を手にピクウィック氏に加勢するサム」（第51章、フィズの挿絵、ハウスホールド版）

二人の編集発行人の争いに割って入ったピクウィック氏は、運悪く両側から攻撃を浴びる。

に接近したピクウィック氏は、小説終盤でどうとう放つてしまった一発のげんこつを金を握る手に変え、最後の登場場面においては、スノッドグラス氏の結婚祝いの客たちと握手を繰り返して、「両手がそのように使われていないときには、喜びに揉み手して」いる（第五七章）。ピクウィック氏の手はいかなる暴力からも縁が切れたのである。善意のブルジョワを登場させるために暴力を必要としながら、その暴力性を完全に打ち消す結末を用意しているのは、この小説がブルジョワジーによる所有の論理を肯定していることの表れだといえるだろう。

\* \* \* \* \*

『ピクウィック・クラブ』の途中から並行して発表された『オリヴァー・トウィスト』において、ブラウンロー氏は本屋の店先で本を読みふける老紳士として初登場する（第一〇章）。ドジャーはブラウンロー氏の「ポケットに手をつっこみ、そこからハンカチを引っ張り出し」、相棒に渡して二人で逃げ去る。同時に恐慌をきたして逃げ出したオリヴァーを犯人だと思いついたブラウンロー氏が「泥棒だ、捕まえろ」の叫び声とともに追跡を始めるが、加勢した人々の一人がオリヴァーを捕え、喰らわすのは「鮮やかな一撃 (clever blow)」。つまり裕福な慈善家というブラウンロー氏の役割の出発点にも、ピクウィック氏と同様、所持品を奪われ取り戻そうとする行為があるのだ。しかしブラウンロー氏のほうは自らは暴力を振るわず、オリヴァー

を気の毒がる。さらに、ブラウンロー氏はピクウィック氏と違い最初から群衆を味方に付けている。『オリヴァー・トウィスト』は『ピクウィック・クラブ』の二つのげんこつのような迂遠な手続きを踏まずにいきなり裕福な慈善家を出現させる。『オリヴァー・トウィスト』における所有と暴力をめぐる問題意識は、紛れもなく『ピクウィック・クラブ』以降のものである。

注

1 Robert Shoemaker, *The London Mob: Violence and Disorder in Eighteenth-Century England* (London: Hambledon and London, 2004) 179-93. 第二章で、決闘の介添人たちがピストルに弾を込めないうち取り決めていることをウィンクル氏がかすかに期待するのは、そういった現実の写しといえる。

2 小説中、本気で決闘をしようとするのは現役軍医のスラムーのみである（第二章）。ほかのさまざまミドルクラスの男たちの間の口論や悪態の中で言及される決闘は、単なるレトリックか一時の感情の暴発にすぎない（第三二、三三、三八、四八、五一章）。デイヴィッド・カストロノーフは、『ピクウィック・クラブ』では上流階級的な「決闘のエートス」がふさわしくない身分の人々によって語られることで茶化されていると論じる。David Castronovo, *The English Gentleman: Images and Ideals in Literature and Society* (New York: Ungar, 1987) 23-24.

3 以上のピュージリズムの歴史については、松井良明「ジェントルマン・アマチュアとボクサーたち 摂政時代のスポーツ界」『周縁からのまなざし もうひとつのイギリス近代』（川北稔・指昭博編、山川出版社、二〇〇〇年）一一一―一二頁。なお、拳闘の文化史、特に拳闘と文学については *Kasia Boddy, Boxing: A Cultural History* (London: Reaktion, 2008) に詳しく、十九世紀英国を扱った第四章には、ディケンズ作品に登場する拳闘を分析した一節がある(97-106)。

4 両者の類似性はベンギン・クラシックス版(二〇〇三年)のマーク・フールドの注による(77n17)。《ピュージリスティック・クラブ》の制服については、松井一一八、および松井の参照している Derek Birley, *Sport and the Making of Britain* (Manchester: Manchester UP, 1993) 169。

5 Wormald 785n4。

6 実際に、集まった大観衆が公共の秩序への脅威とみなされ「一八世紀後半以降、治安判事たちはしだいにプライズ・ファイトの開催を禁じ、あわよくば主犯たちを起訴しようとするようになった」(ロバート・W・マーカムソン『英国社会の民衆娯楽』「川島昭夫他訳、平凡社、一九九三年」二九三頁)。

7 一八三〇―三一年、南イングランド各地の農民が機械化の影響を懸念して暴動を起こし、積み藁に放火するという脅迫の手紙を「キャプテン・スウィング」名義で地主たちに送った(Wormald 775n4)。ピクウィック氏は第一章でスウィングの名に言及している。

8 例外的に回顧する場合も、むしろ過去の不在を強調する結果に終わっている。酔っ払ったピクウィック氏が「子供時代に聞いた歌」を躍起になって思い出そうとするが酔いつぶれるくんだり(第一章)は、ステイヴン・マーカスが指摘するとおり、「個人史を持たない」ピクウィック氏が自分の過去を実際に思い出そうとする唯一の、特筆すべき場面」である(Marcus 38)。また、若しこの求婚の経験を尋ねられたピクウィック氏は、一度もないと力説する(第二章)。

9 カーシャ・ボディ(注3を参照)はピクウィック氏のセリフを拳闘用語として解釈している(Boddy 100)。

10 トニー・ウエラーは、暴力、財産、所有に関してピクウィック氏とは対照的な振る舞いをしている。彼は妻の死後に仇敵と再会したとき復讐の暴力を振るう(第五章)。妻の多額の遺産を即座に現金化し、ピクウィック氏に預けてしまうのは、財産を安全に保管したり増やしたりする方法がわからないからである(第五六章)。そんな彼がトレッドマークのパイプを癪癪持ちの妻に壊されても平然として別のパイプを買ってくるという逸話(第一六章)は、ナイトキャップをとられたピクウィック氏の逸話と好一對を成す。

11 ピクウィック氏の二つのげんこつを含む第四―四三章(第一五号)、ブラウンロー氏初登場を含む第九―二一章(第五号)はそれぞれ、ディケンズの義妹の死による休載後の一八三七年六月、七月に発表されている。『ピクウィック・クラブ』の号の区切りと掲載時期についてはベンギン・クラシックス版(二〇〇三年)の本文と注釈(xxx)、『オリヴァー・トウイスト』に関しては、クラレンドン版(一九六六年)に付された一覧表(369)を参照。